

一八八七年四月八日(金)

タクール、ナレンドラに人々を指導するよう指示

マド
カバツト
僧院の苦行者カーリーの部屋に二人の信者が坐っている。一人は出家、もう一人は在家の人。両方とも年の頃は二十四、五才。二人は何か話していた。そこへ校長が入ってきた。彼は僧院に三日ほど滞在するつもりである。

今日は四月八日、金曜日、ソドホニツチ聖金曜日、朝の八時ころ。校長は先ず礼拝室に行つてタクールを礼拝した。それからナレンドラ、ラカール、その他の信者たちに顔を見せてから前述の部屋に入つて坐りこみ、兩人にあいさつして話を聞きはじめた。この在家の信者は世を捨てたがっている。ところが出家した方は彼に向かつて、ソそういうことはするなクと説得している。(訳註、聖金曜日——英語では Good Friday——キリストが十字架にかけられた日で復活祭の前の金曜日)

出家「残っている仕事をやりたまえ。も少しのことで終わるんだから——。

ある人が、『地獄へ落ちるぞ』と言われた。その人は一人の友だちに、『地獄ってどんな場所だろう?』と聞いた。友だちはチョークで地面に地獄の絵を描いた。その絵が出来上がるや否や、その人は絵の上を転げまわつて、それからこう言った——『これで私はもう、地獄へ行つてきた』と』

在家「私は世間というものが、どうも好きになれないんだよ。ああ、いいなあ、君たちは！」

出家「あんなこと言つて！ 出たけりゃ出たらしい——何ごとも経験だと思つて気楽にすればいいんだよ」

九時過ぎ、シャシーは礼拝室で礼拝供養を行なつた。

十一時頃、マトの兄弟たちは順次にガンガー沐浴をすませて来た。沐浴のあとにさっぱりした衣服をつけて一人ずつ礼拝室へ行き、タクールを礼拝してからしばらく瞑想する。

タクールにお供えしたあと、マトの兄弟たちは皆で坐つてお下がりの食べ物をいただいた。校長もいっしょにいただいた。

日が暮れた。香を焚いた後、献灯^{アールラテ}が行われた。広間にラカール、シャシー、年長のゴパール、およびハリシユが坐っている。校長もいる。ラカールが、「タクールに供える食べ物にはよく注意するよう——」と言つた。

ラカール（シャシーはじめ一同に）ある日のこと、私はタクールの軽食を、あのかたが召し上げる前にうっかり食べてしまった。タクールはそれを見て、こうおっしゃつたよ——『お前の方を見ることもできない。なぜそんな行ないをしたんだ！』と。私は泣き出してしまった……」

年長のゴパール「私もコシポールの家で、タクールの召し上がり物の上で、つい大きな呼吸^{いき}をしました。するとあのかたは、『この食べ物はどういうよ』とおっしゃいました」

校長とナレンドラとはベランダでぶらぶら歩き、いろんなことを思い出ししているんな話をしてい

る――

ナレンドラ「ぼくときたら、一切何も信じようとしなかった。――ご存知でしょう?」

校長「何を? 神の形や何かのことですか?」

ナレンドラ「あの方がいろいろおっしゃることを、はじめのうちはほとんど信じようとしなかったのですよ。ある日タクールに、『じゃ、何故^{なぜ}ここに来るんだい?』と言われてしまいました。

ぼくはその時こう答えました――『あなたに会うために来るんです。話を聞きにくるのではありません』と」

校長「で、あの方は何とおっしゃいました?」

ナレンドラ「とても喜んでおられましたよ」